

大阪府養護教育研究会LD教育プロジェクト講演会（報告）

平成20年1月16日クリオ大阪東において、大阪府養護教育研究会LD教育プロジェクト主催の講演会が開催されました。

講師として岡山大学の佐藤暁（さとる）先生をお招きして、「通常学級で学ぶ発達障害児への困り感に寄り添う支援」というテーマでお話しいただきました。会場には333名の方が集われ、スタッフも含めると350人を越える盛会となりました。先生には、豊富な事例をもとに、支援のあり方について具体的に説明していただきました。

<内容>

①「子どもの”困り感”に気づく”感性”を持って」

発達障害の子どもの一番の特徴を一言で言うならば、「周りの人が何をやっているか直感できない。」ということである。

例えば、人は頼みごとをするときにはまず内容を考えて、頼んできいてくれそうな人に、きいてくれる余裕がありそうな時間（タイミング）を見計らってお願いをしている。これらは人が他人の振る舞いを見て身につける行動であるが、発達障害の子どもはこれがわからない。そのため、お願いごとをしても自分の要求が通らない場合が多く、彼らは慢性的な欲求不満状態に陥っている。

これを解決するためには「適切な方法で要求すれば、大人は誠実に動いてくれる」

ということを教えることである。そして、そのための頼み方を場面設定してさせてみるのである。

大切なことは子どもにどのように伝えるかではなく、子どもが大人にどう伝えるかを教えることである。そして最終目標はスキルを身につけることではなく、「人を信じる力」をつけさせることにある。



②「授業の改善に力を入れよ」

発達障害の子どもたちにソーシャルスキルをいくら施しても、それを受け入れる集団が崩壊しているようであれば、何の役にも立たない。ということは特別支援教育の目標は発達障害の子どものスキルアップをめざすことだけではなく、すべての子どもたちの学びと育ちを保障することである。

そのためのもっとも効果的な手だては、授業の改善に力を入れることである。

具体的方策としては、

- ・学校全体で授業公開を行う。
- ・”教師がどう教えたか”から”子どもがどう学んだか”という観点で見る。

- ・指導案は略案、あるいはそれ以下で行う。（形式張らないこと）
- ・参加する教師はあらかじめ見る班を分けておく。
- ・協議会を開き、子どもの活動を中心に話し合う。
- ・話の目的を「子どもへの”困り感”に気づく」ことと「子どもの学びと育ちを確認する」ことにする。
- ・公開した教師が「やってよかった」と思える公開授業にする。

発達障害の子どもは配慮されるために学校に来ているのではない。学ぶために来ているのである。全体の学びの質が落ちると、発達障害の子どもが困ることになる。リーダーを育て、班の自治、学級の自治に発展させていく集団作り授業作りを行うことで、発達障害の子どもも救われるのである。

③「子どもを救う答えはすべて現場にある」

特別支援教育を行うには何か特別な知識が必要で、特別なことをするようにとられ、先生方が指導に不安を感じてしまうという構図ができていく。が、実はそうではない。今までの実践からできることがいくつもある。

子どもを救う答えは、子どもについて話し合うことから探し出すことができる。現場で自信を持って取り組んで欲しい。

（文責：北河内 LD 研究会 事務局長
大東市立深野中学校 木原 弘）

